



Title	「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」・調査報告
Author(s)	吉原, 卓男
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 196-197
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52860">https://doi.org/10.18910/52860</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」・調査報告

吉原卓男／大阪芸術大学 環境デザイン学科

数年来、大阪に始まり、各都道府県の県庁所在地における都市空間を俯瞰することによって、都市空間における環境デザインの地域性、独自性に関わる調査研究をすすめてきた。ほとんどの都市は、第二次世界大戦時の米軍の空襲により被災し、再建された都市である。再建できたものは、近代という一元的な価値観の様式による、地方特色を無視した個性のない均質な都市空間であることを知った。戦災を免れた都市も結果的にはその後の高度成長とバブルによる都市改造で戦災と同じ一元的な近代化の様相を示している。他方で、空襲や戦後の近代化の洗礼を免れたものもある。それらの都市や集落は、僅かではあるが、独自性を失うことなく今にその姿を保ち続けている。いわゆる伝統的町並みや伝統的民家である。研究テーマ「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」の調査対象としたものは、そのような歴史的・時間的連続性をもって形成された伝統的な都市及び集落の町並みや民家である。対象のなかには、行政（文化庁）による重要伝統的建造物群保存地区及び国指定重要文化財民家の指定物件と重複するものもあった。そしてほとんどの指定物件は、指導によって一律的な修復がなされていた。しかし、それら物件を含めて、多くの家並みや建造物に接することにより、人々の長年住み暮らし、育んできた「町家・民家」とその背景に広がる街並みの景観や自然に庶民の伝統的意識が知覚し、それらをうかがい知ることができたと考えている。調査は、環境デザインの特性についての原則を得るため偏りのないデータを出る限り幅広く求めた。そのために、(a)、一般的に集落形成の分類において歴史地理的に習知の集落分類と、(b)、形とか雰囲気といった感性に関わる部分で日本の伝統をよく保持し、他と区別される都市・集落についても注目した。

a 集落形態を歴史地理学的な区分法によって分類し、その環境デザインが歴史的・時間的連続性をもって醸し出された固有の「かたち」を持つもの。

- 1 街道筋に開かれた宿場としての集落
- 2 門前町・寺内町としての集落
- 3 港町
- 4 産業都市
- 5 在郷都市
- 6 城下町

b 集落の環境デザインを構成する様態が、始源の「かたち」を伝えもつものとして、あるいは固有の「かたち」をばくくもつものとして、あるいは固有の「かたち」を持つとされる集落及び町並は、かつての海上輸送を担った廻船が利用した海の道、内陸部と平野部を結ぶ高瀬舟などによる川運の川筋に沿った川の道、或いは、いく筋もの陸の道によって、みやこ（京・江戸）の文化が全国各地に伝えられ、山々に囲われた郷や盆地で、それをつくる技術と共に土地の環境に育まれ成熟され独自の色合いを持つものとして受け継がれてきたのである。そして、この成熟された伝統文化を伝える「かたち」としての家並みと民家が創り出す景観は、いつしか「小京都」「小江戸」と呼ばれた。それはこの国の人々がもつ都市の始源の「かたち」への共通のオマージュなのであろう。調査では、様々な道と郷や盆地に注目した。パネル発表の作品は、塚本学院教育研究補助費を得て、平成13年～15年のあいだにおこなった調査（文献・現地）を基に、項目別にその特徴を報告書と抜粋しリスト化したものである。なをリストの集落・町並は120ヶ所を越える中からの一部である。

所在地	番号	写真	調査地 地理的位置	地理・歴史的形態 町並みの成立	町並（町家）の要素 構成とその表構え その他	町並みの特徴
青森県	1		黒石市中町・黒石市は、青森県中央部、浅瀬市川原地区の扇状地に位置。中町地区は旧黒石市街地の中心部。	宿場町（黒石山形街道）…明暦2年（1656）陣屋の築造と同時にすでにあった町並みに待町・蔵人町・商人町を加えた町割を行う。「こみせ」はこの時に作られた。	屋敷規模は多様で、間口2.8～23.6間、奥行7.8～45.5間。切妻造・入母屋造が連なり、鉄板葺き（本来、青森はヒバを用いた石置板葺）棟高の低い中二階建、妻入り、真壁造、摺り上げ戸。	中町通り（南北のびる弘前方面から青森方面へ通じる旧街道沿い）に発展してきた「こみせ」は、江戸時代から今に残る木製アーケード状の通路（幅が1.6m前後、軒高は2.3m）。冬季、摺り上げ戸を街道側の柱の間に（一間間隔）に入れ、積雪や吹雪から人を守り、軒を連ねていた旅籠や、商家にとってはなくてはならない装置となる。
秋田県	3		角館市……秋田県のほぼ中央、横手盆地北部に位置。	城下町……角館町の城下町形成は、元和6年（1620）声名氏で現在地に移り住んだことに始まる。城下町角館は、このときの町割りが原形。	武家屋敷の間口は、平均約18m。茅葺きの武家屋敷は建築用材として腐食に耐える短小松を使用。町家は間口を2～4間に制限。多くは杉皮葺きの二階建て道路に面して雪除けを設置。	旧武家町の広い通り沿いに坂が連続し、塀に沿ってシダレザクラやモミの木が美しい木立を形成。薄政末期の屋敷造を踏襲し、屋敷は茅葺の主屋や門・蔵で構成。建設当初に領主の公家からの興入れがあり、京を意識した町造りがなされ、みちのくの小京都と称された。
宮城県	6		村田……柴田郡中央に位置。中央部を松尾川が西北部から南流。南部は水田の広がる村田盆地。北部には紅花や藍を仙南地方で買ひ集め江戸や上方と取引。	商家町……奥州街道大河原宿から北上、羽州街道の川崎宿に至る街道筋村田盆地に町場が形成される。江戸期には紅花や藍を仙南地方で買ひ集め江戸や上方と取引。	店蔵造り、二階建て、切妻・平入、榎瓦葺き、置屋根形式、通りに面して一閑程度の下屋庇。二階窓は縦開きの土扉、一階は通りに面して全面開放で千本格子引き戸、腰高な海鼠壁。	中心街の南北に通る約700mの道路の両側に古い商家が連なる。街道を挟んで短冊形の敷地割りで間口が狭く奥行きが深い敷地南側に、表から奥に通じるトオリノミを設け街道に面して立派な門を持つのが村田の商家の典型的な敷地配置。上方との取引を通じて京を意識した町造りがおこなわれ、みちのく宮城の小京都とも称される。
福島県	8		下郷町大内宿……会津若松の南方の山岳地帯にあり、会津若松から日光街道の市街に至る南山通りの宿場町。	宿場町（南山通り）……敷設当初（17世紀初め江戸初期）は会津と関東を結ぶ最長の幹線道路として賑わった。江戸中期には荒川街道が整備、次第に廃れる。	茅葺き寄棟造り妻入り、街道に面した軒を「せがいでり」又は化粧壁木で飾る。宿場時代、街道に面した妻側に二階の座敷を並べ縁側を設け、客室として使用。今は観光客に土産物を並べるミセとして使用。	山間部の半農半町集落である。街道（南北に約400m）を挟んでおよそ40～50坪の茅葺き寄棟造りの主屋裏側に街道に向けて45坪の座敷が規則正しく並び、家屋の南側は土間入口への通路と作業空間を兼ねた二ツである。かつて中央にあった水路は、今もなお街道両側に豊かな水量で流れている。
千葉県	10		佐原市……佐原市は千葉県の北東部、霞ヶ浦に注ぐ桜川下流域に位置。	商家町・川港（利根川）……周辺農村の中心であり、穀物の集積、商業、醬・醤油の醸造業用の水道とも密接に関連、河港商業都市として発達。	木造真壁造、蔵造・塗籠、切妻・寄棟、平入・妻入、平家建・二階建てなど多様な建築様式。	利根川支流、小野川とそれに交差する街道沿いの町家や土蔵の町並みと柳並木や街灯の「だし」等が河港商業空間のつくりの景観を持つ町並みである。水路江戸と直結していることから、江戸の影響を大いに受け小江戸とも呼ばれる。
長野県	23		南木曾町妻籠宿……急峻な地形に囲まれ、水曾川支流関川によって形成された小盆地、標高420m前後に立地。	宿場町（中山道）	元石置き板葺、鉄板葺に改造、切妻、平入真壁中二階建。表構えは、一・二階の出桁で深い軒、二階両端塗壁。	昭和51年9月に妻籠宿が、文化財保護法による日本で最初の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定。木曾路には宿駅制度によって11宿あったが妻籠が一番小さな宿場であった。宿場は南北に貫く中山道に沿って、北から下町・中町・上町があり、枳形を挟んで寺下の町並みが続いている。
岐阜県	30		美濃市美濃町……長良川中流とその支流坂取川、片知川などに沿った地域。	商家町……金森長近が小倉山に築城城下を整備。屋敷地は江戸期には道路に面する間口により年貢が課せられた故、間口が狭く奥行きが長い短冊状の町割。	切妻造り本即建、平入り、中二階、漆喰塗籠虫籠窓、榎瓦葺、格子、煙出し、オダレ（下屋の出桁の下に架け渡される幕をかけるための材）パツタリ。	金森長近は一生に3つの町を作った。越前大野・飛騨高山、最後のが有知（美濃）。いずれの町も城を中心に城下町を造り、戦いより経済を中心とした。上有知では美濃和紙の製造・販売による繁栄、伝統的な塗籠窓の民家が軒を連ね「即建」に象徴される町並は江戸から明治・大正及び昭和初期に建築された。
新潟県	36		津川……下越地方の南東部、阿賀野川が津川盆地西部を流れ、中央部を北流する常浪川と阿賀野川が合流する河岸段丘に位置。	宿場町・河津……会津街道と阿賀野川の水運を結ぶ水陸の中継地・津川船道の起点として繁栄。六歳市が立ち、米と新潟産からの塩・衣類などの交換で賑わった。	街道沿い約1kmトンボの町並が続く。鉄板葺き、2階建て、真壁、上坪には切妻・平入り、仲町には切妻・妻入りが多く見られる。私有地を公共のとして使うトンボは雪の多いこの地方の生活道路。	慶長15年大火があり、町中残らず消失。津川城主岡正重はこの機会に整備を行った。本町内13軒はすべて板屋根と土蔵を許し、端町は板屋根、売店ともに許可しなかった。平板造りという庇をつけた。これが雪国の樺太（津川ではトンボ）だが、会津地方では津川以外つられていない。
富山県	40		八尾町……神通川の支流、井田川が平地に流出する山麓に位置する。北に越中平野の村々を望む。	門前町（聞名寺）……洪水により家や耕地を失った人々が、寺のある高台に移住。寛永13年（1636）成立。	元は石置き板葺、榎瓦・鉄板葺きに改造、切妻、平入り形式の二階建て、出桁造。	井田川と別荘川に挟まれ細く長く広がる坂の町・八尾。井田川沿いから眺める土蔵のような斜面に石垣が積み、その間を縫うように丘の上に向かっていくような石段と坂の小道がつつらおりに続く。

所在地	番号	写真	調査地 地理的位置	地理・歴史的形態 町並みの成立	町並（町家）の表構え 構成とその要素 その他	町並みの特徴
石川県	41		金沢市・茶屋町……卯辰山西麓の浅野川沿いに位置。	茶屋町……文政3年（1820）近辺に点在の御茶屋を集め町町。	元は石置き板葺、横瓦・鉄板葺きに改造、切妻、平入り形式の二階建て。	通りに面して一階を削いだ出格子、背の高い二階には吹放しの縁側と座敷を備える姿は藩政末期以来の茶屋建築の特徴。茶屋建物の第一の特徴は、井筒廻りの出格子。その細い格子は「キムスコ」と呼ばれている。京都の影響を受けた「お祭り」や文化的な繋がりが小京都といわれる。
三重県	48		三雲町市場町……重慶の中央部の海沿い、三波川の右岸低地域に位置する。	宿場町（伊勢街道）……蒲生氏郷、天正16年（1588）、道筋を整備、道沿いに新しく集落を形成。	切妻造、厨子二階建水切り庇付出格子、妻入、或いは中二階建、平入、横瓦葺、一階軒庇は瓦葺、葺板付、外壁は押縁下見板。出格子、格子戸。	敷地の北側の土庫を建て南側に蔵を確保、間取りでの共通点は、街道に面した主屋の中央より南側に出入口を設け、その南側に「女中部屋」、その奥に「だいたごう」「かっく」などの軒屋が続く。明治中期から大正初期にかけて市場町の町家のファサードに大きな変化が起こる。ミセ全面を解放する摺り掛け戸の必要性がなくなり出格子に変化する。
滋賀県	53		西浅井町・菅浦……琵琶湖北部端部半島先端に出来た小湾の湾奥にあり背後は急な山腹傾斜面が迫る。	漁村集落（琵琶湖）……天皇に食料を献上する賢人が、この浦に漁り漁業を営んだのは、平安時代以前とされる。	切妻、妻入り。平入りの混在。浜と居住地区の境に波除石垣。各住戸の屋敷廻りに浜側に石垣の囲いをめぐらし水害に備えている。	中世の頃から自治の村落共同体「惣」を組織。四足門の内側に余所者は住めず、里の者でも道理に反する行為があれば門外へ追放するなど、惣の掟によって厳しく裁かれた。
兵庫県	63		佐用町・平福……千種川支流佐用川中流域、利神山（山上に城郭）西麓。	宿場町（因幡街道）……利神山上に城郭、街道沿いに町人町を慶長15年（1610）に、現在の地割完成。町並は城下町であり宿場町、在郷町としての商家が多く見られる。	切妻造、平入、本瓦又は横瓦葺、中二階、白漆喰壁又は土壁、一部裏葺や黒壁、虫籠窓、格子、一部煙出し、駒つなぎも残っている。	街路の東側を流れる佐用川沿いの石垣の上に建ち並ぶ白壁、土壁の川屋敷、川座敷、土蔵等が道に出す戸筋の景観には特有なものがある。街道筋の商家軒下を弄るには清流が流れる、生活に利用した上水道の出来方、下水路は上水道と道路の下を横切って、全て佐用川に流れていて上下水道を巧みに交差する工法がとられている。
岡山県	68		成羽町吹屋……成羽の町から成羽川の支流を北に約9km進んだ吉備高原の町（標高約500m）。	ペンガラと銅山の町……銅山の歴史は古く、江戸期は幕府直轄の銅山、19世紀前半から井筒の生産。明治になると三雲の所有、一時は日本三大銅山として隆盛。	町並みは、古い形式の家屋は切妻に下屋をつけた妻入、中二階建て。新しいものは、母屋造・妻入が主で平入は僅か、二階建て。屋根は土州杭瓦葺。白漆喰壁と井筒入りの石垣が混在。海尻造、ペンガラ格子。	赤銅色の石州瓦とペンガラ色の外観で統一された、見事な家並みが整然と続く町並み。
鳥取県	74		米子市……県の最西端に位置し、近畿圏に隣接。大山東麓、加茂川の河口、中海に面し米子港を持つ。	城下町（米子城）……慶長元年（1601年）、中村忠一が城主となり、米子城の築城、城下町の整備を行う。	切妻・平入、横が葺き、中2階建て。虫籠窓で出桁造りのは漆喰塗込造り。一階は裏葺、木格子の建込み葺。加茂川沿いには商家の土蔵屋敷が数軒並ぶ。	江戸期、米子港を中心とした商業の町として発展。港に近い加茂川沿いの町人町には鹿島家や渡瀬家などの米屋・廻船問屋などの豪商の屋敷が立ち並び繁栄していた。
広島県	79		福山市……福山市の南部、沼開半島の先端部に位置する。背後に急峻な山をかかえたる波静かな入江に面する。	港町……江戸期には上関、浦刈、牛窓、室津など東西に航路の最重要港として栄える。明治以降交通手段の変化と共に衰退。	間口が1間半〜2間と狭く深い奥行きを持ち、隣家と外壁を共有する独特の構成例も見られる。一方で切妻・母屋造、平入・妻入が混在し、それぞれ本瓦葺の重厚な商家と、多様・多様な家屋がみられる。	竊の町並みとして、江戸期の建物が約80棟残されている。町は歴史資料館のある高い丘より南側に古い時代からの港町。港町特有の細い路地が入り組み、路地に面しては間口の狭い家が続き、独特の町並みを作り出している。
徳島県	85		脇町 南町……徳島県西部に位置し吉野川の中流域北岸に位置する。	在郷町……江戸期藍造が阿波の代表的産業、陸上交通と吉野川の水運に恵まれた脇町は藍の集散地として栄えた。	伝統的な町屋、22/50戸が、間口四間半以上。敷地の奥行きは深く、80m以上を超えるものもある。切妻造、母屋造、平入・妻入が入り混じり。本瓦葺、中二階、塗喰の虫籠窓、格子、出格子、本瓦葺様・鬼瓦付柳建。	近世に発達した吉野川中流域の在郷町として、江戸時代中期以来の町家建構が多い独特の重厚な意匠の町並みを残し、特色ある歴史的環境を形成。町並みの中心は南町で東西の通り430mに短冊形地割りで、切妻造・平入、街道に向かって鬼瓦を乗せた特徴的な地割建の町家が連なる。
高知県	88		室戸市吉良川……高知県東部に位置する吉良川町は、江戸時代に高知から室戸に至る街道沿いに形成。寛政6年（1794）には整う。	在郷町……明治〜昭和初期の間、良質の木炭集散地として繁栄。街元の旧街道の拡幅計画は住民の反対によりバリエーションを建設、町並みを保存された。	町並みは、中2階建、切妻造・平入、横瓦葺、漆喰塗喰虫籠窓。外壁は下見張り、水切り瓦、海鼠壁の区別。商家には玄間脇に閉じれば雨戸、開ければ縁廊になる上下開き板「ぶっしょう」がつく。	集落は、海岸に近い下町地区、山側の微高地の上町地区よりなる。下町は、東西に幅幅2〜3間の土佐土佐街道に沿って両側に短冊型地割（間口4〜6間の）の両側町。隣家との間に屋根のなな3〜1間程度のトオリつつがつく。上町地区は細い街路と屋敷の周囲に「いしぐろ」と呼ばれる石垣道を巡らす農家型の地割りで方形である。
愛媛県	91		内子町八日市護国……四国山脈から西流した小田川と中山川及びその支流鏡川が町域の内山盆地を形成。	木製町……文久年間白銅製で、飛騨に由来し、寛政期の明治中期には、国内の主要生産地となる。	入母屋・切妻が混在。平入、漆喰塗喰虫籠窓、海鼠壁、彫物付格子、縁廊の壁。横瓦葺、葺板付、バツトリ。	浅黄色と白漆喰の塗喰造の重厚な外壁、平入造りで、街路に連続した壁面が際立つ。ここでは見られない隣家との間の水路や水路による路地空間。外壁の漆喰壁にさまざまな装飾が鮮やかな色調で描かれ往時の繁栄を偲ばせる町並みである。
宮崎県	94		日向市美々津……耳川の河口に位置	日向市美々津……文久元年（1869）頃には、現在と同規模の集落が成立している。	妻入、平入の混在。土蔵造、白漆喰壁、柳目板葺壁又は海鼠壁、2階造り、鉄板、1階は葺上板葺、格子造り……敷地間口広く、矩形、奥りに導・垣、は門を構え、袖籠の配置もある。	耳川の河口に位置する港で江戸時代には高鍋藩の商業港。地区は上・中・下町に分かれ3本の土庫やツクヌケと呼ばれる防火路など昔の区割りが残し、幕末から明治、大正、昭和期の町家が混在。
佐賀県	98		鹿島市・津浜地区……浜浜に隣接する浜川河口に位置し有明海に通じる漁港。北は有明海に面する。	漁村集落……長崎湾道に面した両河町の津・金屋地区と、河対岸の庄津の漁村地区とに分かれる。	魚津地区は平屋及び中二階建てが多く、街道筋は中二階及び二階建てが占められ、屋根の形式は入母屋及び寄棟、平入、葺葺、下屋部分は瓦葺。	浜川を挟んで北津津、南津津と呼ばれ、漁民の家は川に面して形成していたが、河港に面した町並みは河川改修のために大増に解体され川に面した景観は失われた。船津の集落は平田等によりかなり内陸に引き寄せられているが、浜川の南岸にある地区には、茅葺、藁葺の民家のみ僅かに残っている。
福岡県	101		吉井町・筑後吉井……耳輪山地北麓から筑後川左岸にかけて位置し、中央を巨瀬川が流れる。	在郷町……商品作物の集散・加工を営む在郷町として、明治初年には屋敷町が立ち並ぶ盛やかな商業都市として発展。最盛期の大正期には現在よりも町並み形成。	町家型……入母屋造、妻入、土蔵造、白漆喰壁、柳目板葺壁又は海鼠壁、2階造り、鉄板、1階は葺上板葺、格子造り……敷地間口広く、矩形、奥りに導・垣、は門を構え、袖籠の配置もある。	豊後街道沿いに漆喰塗喰の重厚な町家が連続する町並みと災除川と新南川沿いには広がる屋敷群。明治2年の大火を契機として、草葺の川沿いにかけて瓦葺塗喰が普及し始め、大正期になって重厚な町家が立ち並ぶ景観が完成。
沖縄県	103		那覇市金城……沖縄本島北部の台地斜面に広がる地域。安里川に臨む。地名は城の美称。城下の村を意味する。	城下町（首里城）……尚真王の時代（1477〜1526）に首里城から南へ主要道路として整備。	金城町は、かつて王朝に勤務する士族たちの住む城下町。道路沿いに方形の屋敷割りによって形成されており、その道路は、琉球石灰岩を用い、石の表面に刻みをつけて滑らない配慮がされている。	昭和二十年の沖縄戦が初戦突撃によって焼き尽くされ、途絶物の町ととなる。そのために日本軍の隠れる場所がなくなり、その後の猛砲撃による破壊を受け、焼け跡に琉球石灰岩の石畳と切石積みで敷き詰められた石垣が残され、再建された赤瓦の家並みが昔の面影を伝える。